

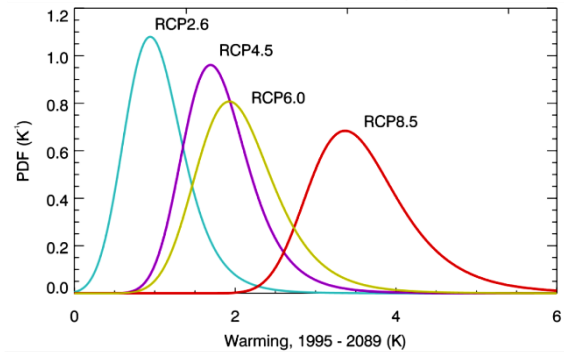
## 地球環境と世界経済の2つの復興

### ◆温暖化予測の新たな報告：90%の確率で2.3～4.7℃の気温上昇

2020年7月22日、世界気候研究計画（WCRP）は、地球温暖化の予測精度に関する新たな研究論文をReviews of Geophysics誌に発表した。この研究では、1)太平洋東部と南極海の海流による太陽光の熱吸収量の飽和、2)雲の厚みによる太陽光反射と輻射光蓄熱に関する気温とCO<sub>2</sub>濃度の影響、3)2万年前の氷河期ピークと300万年前の温暖期の古気候学的事実と現在のCO<sub>2</sub>濃度との関係などの地球環境モデルを複眼的に組み込み、ベイズ統計処理による予測計算を行った。

それによると、2060年までに大気中のCO<sub>2</sub>濃度が560ppmとなった場合の産業革命前からの気温上昇は、66%の信頼区間で2.6～3.9℃、90%で2.3～4.7℃と予測され、「気候変動に関する政府間パネル」（IPCC）が従前に採択してきた1.5～4.5℃の予測幅を狭め、より精度の高い結果となった（図）。

図 2089年の気温上昇の確率密度 (R. Geophysicsより引用)



横軸：大気中のCO<sub>2</sub>濃度が560ppmとなった場合の2089年と1995年との温度差。  
縦軸：横軸の温度差に至る確率密度。RCP2.6は21世紀末にCO<sub>2</sub>排出量ゼロ、RCP8.5は現状ベースで増加、RCP4.5とRCP6.0はその中間に相当するシナリオ。

「気候関連財務情報開示タスクフォース」によれば、2℃、ならびに、4℃の気温上昇に伴う、企業活動のリスクと機会の開示が要求されている。本予測によれば、2℃以下の確率はわずかに5%以下であり、6～18%の確率で4.5℃を超える。世界が温暖化抑止の活動を加速しない限り、4℃のシナリオに至る可能性が高い。

### ◆再エネ投資による経済復興とゼロカーボン経済移行の両立

7月9日、IEAが主催した「クリーンエネルギー転換サミット」で再生エネルギーへの財政出動によるパンデミックからの経済復興について各国閣僚が討議した。21～23年に年1兆ドルを投入し、各年1.1%のGDP成長と9百万人の雇用を創出しつつ、ゼロカーボン経済に移行する、との計画である。異論もあるなか、各国で吟味の上、21年のCOP26で進捗が報告される。人類は、地球環境と世界経済の2つの復興に取り組まねばならない、待ったなしの状況を迎えた。【酒向謙太郎】